

内部評価① 安藤 輝次氏

平成27年度 AP評価報告書についての内部評価

文学部 安藤 輝次

ルーブリックは、平成27年度報告書(97-104頁)の事前調査結果に示すように、わが国の大学では注目されただけであり、本格的導入はこれからということでしょう。ただし、アルバーノ大学のルーブリックが一般教育で8つの能力を6つのレベル、専門教育は学科によりますが、一般教育とほぼ同じ数で、その一部の能力は重複しているように、どの大学教員も使えるようにするためには、多くの先生方が関わり、最大公約数をまとめていく地道な作業が必要です。ルーブリックを使った学生は、確実に伸びます。そこでのデータがIRにも使えます。その意味で本研究は有意義であると思います。研究2年目の本年度報告書を読ませていただきました。ほぼ予定にそって鋭意研究をなさっておられることに敬意を表します。

そして、以下において、今後のご研究の参考になればと思い、疑問に感じたことを幾つか申し上げます。

第一に、昨年度の報告書にもありますが(35頁)、私自身あまり聞きなれない「クラスルーブリック」の定義は、どこになされているのでしょうか。本年度の報告書において「クラスルーブリック尺度スタンダード」(13頁)と言われると、一層分かりません。その後、「クラスルーブリックの普及・項目検討」(83頁)ということが言われ、ルーブリック導入クラスの一覧表が現れます。

もしもクラスルーブリックが各授業科目やその中の特定の授業で取り上げる特有なルーブリックを意味するのでしたら、実際には教育効果を発揮できません。これまで京都大学の教育方法学の先生方が小中高のレベルで単元ごとに一つのルーブリックを提唱してきましたが、数年前からアメリカでは一般的ルーブリック(generic rubric)と呼ばれるものに似ている長期的ルーブリックに方針を転換しています。私は、十数年前から学習者だけでなく教師でさえ使うのが難しい単元ごとのルーブリック(task-specific rubric)より教師も学生も形成的評価にも使える一般的ルーブリックが必要だと主張してきました。実践すれば、誰でも分かります。「コモングルブリック」をプレゼンテーションやライティングなど特定の活動に関わるものと定義して、それを学年や各科目の授業目的にそって変形して使うのなら分かります。その場合には、「コモングルブリック」と「クラスルーブリック」とは何かということについて報告書で章節を設けて定義し、コモングルブリックからどのようにクラスルーブリックを変形するのかという手順や方法・技術を論じて欲しいです。

第二に、スタディスキルやレポートなどのルーブリックは挙げられていますが、これは、実践を経て、どのように修正加筆されていったのでしょうか。例えば、私は、関大のロゴマークの入ったプレゼンテーションのルーブリックを秋学期の「社会科教育法」で3度使いましたが、プレゼンターの多くは、用意した学習指導案を見て話して、「発表相手の方を向いて話す」という項目がなくて、困りました。アイコンタクトまで言わなくとも、発表相手と正対するって根本的に大切なことではないでしょうか。とすれば、この評価語をプレゼンテーションのルーブリックに含めるべきです。そのようにして使い勝手のよいルーブリックが出来あがるのです。そして、1年次生から4年次生に向けてのルーブリックのレベルの順次性も決まってくる。そのような研究の経過を経てこうなったというのが本報告書から読み取れません。

第三に、ルーブリックを導入するには、①学部生の学びの途上で形成的評価と次の学びへの示唆や教師の授業改善、そして、②教師による学期末の成績評価まで含めると、説明的授業より多大な労力を要するので、電子ポートフォリオの導入が急がれるのですが、それが構築されても①については、LAよりむしろチューターという意味合いの濃いTAの活用が望まれます。そのような実践的研究は視野に入っていないのでしょうか。

第四に、LA制度や交渉学について、各種のワークショップを開催されていますが、参加者の感想と写真が多用されており、雰囲気は感じられますが、学びが伸びたかどうかというアンケートや評定尺度などの量的データやルーブリックの点数の変容のような質的データが欲しいです。ルーブリックの事前事後の効果の研究は、あまりありませんが、拙稿「ルーブリックによる文章表現の評価学習法」『関西大学教職支援センター 2014年報』や院生(小林祐也)の「クリティカルシンキングの育成と評価法」『日本カリキュラム学会紀要 第25号』(採択再審査中)が参考になるかと思えます。

内部評価② 中村 隆氏

大学教育再生加速プログラム「21世紀を生き抜く考動人(Lifelong Active Learner)の育成」2015(平成27)年度 内部評価報告

内部評価委員
社会安全学部教授 中村 隆宏

年次計画によれば、2015(平成27)年度は「本格的実施フェーズ」として位置づけられている。具体的には、テーマⅠに関しては、「交渉学科目の開講」「クリティカルシンキングに関する科目の開講」「交渉学ワークショップの実施」が、テーマⅡに関しては、「コモングルブリックを活用した実践授業、学修行動・到達度調査の実施」「学修成果可視化に取り組む学部との協働調査」等々が計画されていた。FD/SD・事業運営に関しては、「交渉学・キャリア教育に関する国内外の先進・類似事例の調査ならびに学習会の実施」「学生スタッフ育成プログラムの実施、学修コンサルジュ研修プログラムの開発」等々、計画内容も極めて多岐にわたる。

2015(平成27)年度においては、これら年次計画に従った活発な活動が報告されている。「Lifelong Active Learnerの育成」に関連しては、「行動力及びリーダーシップ育成研修」が計12回開催された。また、FDフォーラム・SD研修(人事課・階層別研修)・FDカフェ(新任教員対象研修が開催されたほか、交渉学・クリティカルシンキングの要素を取り入れた授業の実践が行われている。「行動力の成果指標開発と検証」に関連しては、初年次教育アンケート調査、学修行動調査・到達度調査が実施され、その結果については学内報告会を通じて情報共有が図られている。また、「調査報告」については、国内に留まらず海外の事例も対象に行うなど、幅広く多岐にわたる活動が展開されている。

これらの結果から、計画2年目の進捗は概ね順調で、ほぼ計画通りに活動が行われてきたと評価する。

一方で、今後の展開においては、以下の点について更なる検討が必要だろう。

一つには、研修・ワークショップ等の諸活動が他大学との交流・情報共有の有意義な機会となっている点は高く評価すべきであるが、得られる成果が分散・拡散し、成果が本来還元されるべきところに行き渡らない、といった事態に陥らないよう留意しなければならない。次に、学内外で実施される各種調査結果については、現時点では必ずしも十分な蓄積とは言えず、今後も更なる検討が加えられていくことになる。すなわち、調査結果から一般の見解を得るためには、現状の個別サンプルのみから結論を急ぐことなく、今後の「評価」ならびに「改善」フェーズも含めて十分に検討することが必要である。

なお、2年目の活動が極めて活発に行われているものの、当プログラム担当者ならびに関係者の尽力に頼っている感否めない。より幅広い総合的・全学的な取組みへの拡充と充実が重要である。

外部評価① 一色 正彦氏

大学教育再生加速プログラム 「21世紀を生き抜く考動人〈Lifelong Active Learner〉の育成」 2015（平成27）年度 外部評価報告

外部評価委員
金沢工業大学大学院 知的創造システム専攻
客員教授 一色 正彦

平成27年度（本格的実施フェーズ）において計画されている各テーマについて、平成27年度AP成果報告書に基づき、以下に評価する。

テーマⅠ：交渉学科目の開講、クリティカルシンキングに関する科目の開設、交渉学ワークショップの開催について、交渉学ワークショップ5回を含む、考動力及びリーダーシップ育成研修が12回実施されている。また、アクティブ・ラーニング関連FD/SDのフォーラム、交渉学・クリティカルシンキングの要素を取り入れた授業の実践なども、計画通り実施されている。テーマⅡ：コモンルーブリックを活用した実践授業、学修行動・到達度調査の実施、学修可視化に取組む学部との協働調査について、初年次教育アンケート調査、学修行動調査・到達度調査を実施し、各学部との情報共有が実施されている。FD/SD・事業運営：交渉学・キャリア教育に関する国内外の先進・類似事例の調査、学会等の実施、学生スタッフ育成プログラムの実施、学修コンシェルジュ研修プログラムの開発について、国内の大学に加えて、海外の大学の調査も実施されている。

以上から、平成27年度について、本事業の2年目として、実施計画に従い、順調に推進できていると評価できる。特に、学生の主体的な企画や取組みが増えていること、他の大学との交流を実施していること、更に、社会人との交流に展開していることが評価できる。

但し、3年目以降の推進に関連して、検討を要する事項を指摘する。本事業は、学生に対して、交渉学研究を用いて、生涯に亘って創造的な思考と責任ある行動を実践し続ける考動人に養成することを目的としている。研修やワークショップ等に参加した学生が、学んだ内容をどのように認識したかは、学生の報告書から部分的に推察することができる。しかしながら、今後の課題として、学生が交渉学から何を学び、どのように意識が変わり、そして、具体的にどのような行動に繋がったかについて、学修の前後、複数年に亘る学生の活動を通して、その変化や成長を確認し、検証する必要がある。また、授業やワークショップ等の企画や実施において学生が作成した成果物は、取組みの記録であると共に、継続して学ぶ学生が共有できるナレッジでもある。継続的な考動人を養成するためには、学生の学びや意識、行動の変化を記録に残し、その内容を検証すると共に、その記録や成果物をナレッジとして次の世代に伝承することが重要である。

従って、上記の目的に対して有効な情報の収集と効果分析の方法を検討し、継続的に実施する必要があると思われる。

外部評価② 沖 裕貴氏

平成27年度AP評価報告書についての外部評価報告

外部評価委員
立命館大学教育開発推進機構・教授 沖 裕貴

2014年度成果報告書および2015年度成果報告書（案）を拝読させていただいた。また、併せて内部評価委員のコメントも熟読した。

内部評価委員の安藤輝次委員は質的評価の専門家であり、ルーブリックに造詣が深く、極めて専門的な見地から本事業に関するコメント、特にクラスルーブリックに関する成果と課題を述べられている。また、中村隆宏委員は産業心理学の専門家であり、本事業を包括的な観点から俯瞰し、到達点と今後の展開への示唆を述べられている。

お二方とも極めて専門的かつ中立的な立場から内部評価を行っておられることに敬意を表するとともに、何よりもまず、本事業「21世紀を生き抜く考動人（Lifelong Active Learner）の育成」に関して、貴学ならびに各部会の教職員・学生が組織的かつ精力的に取組を推進しておられることに心より讃辞を呈したい。

その上で、お二方の内部評価委員のご指摘になった事項に加えて、2点ばかり今後の検討材料を提案したい。

1つ目は、安藤委員のコメントと同様、クラスルーブリックの定義と役割が不明確な点である。報告書にはスタディスキルゼミにおける評価課題に関する課題特異的な「採点用ルーブリック」の事例が挙げられている。これらの開発の重要性や意義は十分に理解できるが、最終的に本事業の達成目標である「考動力」あるいは「考動人の育成」はコモンルーブリックで評価することが謳われていることから、コモンルーブリックとクラスルーブリックとの関係性を明確にしておく必要がある。特にスタディスキルゼミや基礎演習等、p.84やp.85に挙げられているクラスは恐らく到達目標も異なり、成績評価方法も異なっている。これらの採点用ルーブリックは必要不可欠だが、「考動力」との関連性や「長期的ルーブリック（あるいはカリキュラム・ルーブリック、プログラム・ルーブリック）」となるはずのコモンルーブリックとの分担、関係性が見えてこない。

2つ目は、中村委員の補足になるが、「単発イベントの連続に留まるのではなく（p.148）」と述べられているとおり、報告書全体からはイベントの連続が報告されている感がぬぐえない。もちろん一つ一つのイベントや事業は、極めて精緻に設計されており、また、その成果は行間からさえ十分に伝わってくる。ただ、それらを効果的に見せる工夫が欲しい。

具体的には、研修の中にもあったようだが、「ロジック・ツリー」を用いた取組全体（p.3-14）の「目標-手段」の関係性の明示と、各手段（この場合は各イベントや事業）が上位の目標を達成したと見なすための「評価指標・評価基準」の整備が必要だと考える。個々のイベントや事業がどんな目標を達成するために行われ、それが成功したか否かは予め準備された評価指標と評価基準に基づいて行われ、結果として目標が達成されたことを示すわけである。これらが細かく点検されることで、年次進行に伴い、ロジック・ツリーのさらに上位の目標が挙証され、最終的には「考動力」の育成に成功したということが出来るはずである。それによって、成果報告書自体が、極めて論理的な構造を持ち、本事業の成功をより効果的に見せることにつながると考える。

関係者のご尽力に最大限の賛辞を送るとともに、次年度のさらなる発展を期待しています。

外部評価③ 川嶋 太津夫氏

関西大学「21世紀を生き抜く考動人〈Lifelong Active Learner〉の育成」
(平成26年度「大学教育再生加速プログラム」) 外部評価大阪大学未来戦略機構・教授
川嶋 太津夫

○2名の内部評価者によるコメントは妥当なものと考えているが、以下に本評価者の所感を記す。

○取組全体について

・報告書に記された平成26年度、27年度の当初の計画通り事業は実施されているが、3ページに記載されている取組全体の本取組スキームに記されている各取組や概念についての定義や説明が欠けているため(申請書に記載されていたり、関西大学関係者には自明の概念や取組だったりと推察しますが)、報告書に所収された各活動報告の位置づけ、相互関係が十分に理解されないおそれがあります(安藤教授の内部評価書にも「クラスルーブリック」についての説明不足が指摘されています)。

・「報告書」という位置づけなので平成27年度の各種活動(非常に多様な活動が行われていることには頭が下がります)の報告が掲載されていますが、これはいわば「アクティビティ(output)」に関する報告になります。活動に参加した学生や教職員の振り返りやコメントが含まれていますが、活動の「成果(outcomes)」についての記載も必要と考えます(12~13ページに「取組の成果と波及」が記載されていますが、これはあくまでも「期待される成果」であって、実現した成果ではないのでは)。それがあって、初めて「評価(evaluation)」が可能になります。

○テーマI

・計画のうち、交渉学WSは計画の2回以上頻繁に開催されているが、交渉学科目の開講およびクリティカルシンキングに関する科目の開講の検討については、報告書を読む限り最低限の実施状況である(74~76ページ)。

○テーマII

・このテーマのもとでは、かなり多様な活動が計画されていたが、その中でもコモンルーブリックの活用と全学共通の学修行動・到達度調査の実施である。コモンルーブリックの導入、運用に当たっては、ルーブリックの作成のみならず、その運用に当たっては教員間のアセスメントの等価作業が不可欠である。サンプルの学習成果物を活用したワークショップの開催が今後重要である。また初年次教育アンケート調査の報告が掲載されているが(87~91ページ)、初年次教育の開講に当たって、学習目標や評価方法について、全学共通のガイドラインは策定されていないのであろうか。同一科目複数セクションが開講されている場合、成績評価基準の共通理解も不可欠であるため、そのようなガイドラインは重要です(既にあるのでしょうか?)。

・全学共通の学修行動調査・到達度評価の実施については、学生の「学んだつもり」、教員の「教えたつもり」の確認、是正に重要な役割を果たすことが期待される。また、各学部で行われている各種の学生対象の調査の洗い出しを行い、できるだけ整理することは「調査疲れ、回答疲れ」を回避するために重要なことです。8ページにそのことが指摘されていますが、そのような確認はされた上で、実施されたのでしょうか。

入学時調査は、オリエンテーション時に調査票を配布することにより、97.3%の回収率を得たが、今後のパネル調査や卒業時調査で、対象(サンプルなのか悉皆なのかは調査の目的によって異なる)、回答方法の工夫が必要で、先行した本学の経験からは、ウェブによる悉皆調査での回答率はかなり低いことを参考のため指摘します。

外部評価④ 隅田 浩司氏

大学教育再生加速プログラム
「21世紀を生き抜く考動人〈Lifelong Active Learner〉の育成」
2015(平成27)年度 外部評価報告書東京富士大学大学院経営学研究科
教授 博士(法学) 隅田 浩司

1) 活動内容の個別評価

「本格的実施フェーズ」と位置づけられた平成27年度では、テーマIにおいて「交渉学科目に開講、クリティカルシンキングに関する科目の開講検討および、交渉学ワークショップ年2回実施が計画されていた。そして、実際に、考動力&リーダーシップ育成研修が合計12回開催(うち5回は「交渉学ワークショップ」という名称にて開催)されている。他方、クリティカルシンキング科目の開講については、報告書75頁において「関西大学ピア・コミュニティ入門」の廃止と交渉学クリティカルシンキング関係科目開講の決定の概要が記載されている。その他、報告書の記述を総合的に勘案し、テーマIについて、平成27年度の実施計画に基づき、適切に計画が履行されたものと判断する。

テーマIIにおいては、「コモンルーブリックを活用した実践授業、学修行動・到達度調査の実施」、学修成果可視化に取組む6学部(学内AP)との協働調査が計画されていた。さらにFD/SD・事業運営として「交渉学・キャリア教育に関する国内外の先進・類似事例」の調査および学習会等の実施、学生スタッフ育成プログラム、実施、学修コンシェルジュ研修プログラム開発、そして点検・評価の詳細が計画されていた。FD/SD・事業運営に関しては、国内調査8カ所、国外調査2カ所の実施FDフォーラム、SD研修およびFDカフェにおける交渉学関係授業の実践と意見交換が実施されている。また、初年次教育アンケート、クラスルーブリックの検討(報告書83頁以下)が行われている。その他、報告書の記述を総合的に勘案し、テーマIIについて、平成27年度の実施計画に基づき、適切に計画が履行されたものと判断する。

2) 総合評価

総合的な評価として、本事業は、実施計画に基づき着実に活動が行われており、適切な運用がなされているものと判断する。また特に優れた点として、「考動力&リーダーシップ育成研修」においてLearning Assistantを中心とする学生の主体的活動を促進している点、次に、同研修において社会人・外部機関(企業など)との連携による多様な学習環境を提供している点は、アクティブ・ラーニングの本旨から見て望ましいものである。

なお、本事業の次年度以降の実施に際しては、次の3点についてさらなる検討を要する必要があると料する。第一に、「考動力&リーダーシップ育成研修」について、参加学生の自発的な活動が行われたことが定性的には判断できるものの、実際にこの12回の研修に参加することによって交渉学の理解やその実践的な応用力がどの程度向上したかを客観的に分析できるデータなどが提示されていないため、実際にどのような教育効果があったかを事後的に分析することが難しい。この点について、今後、適切な対応が必要と料する。

第二に、ルーブリックに関する報告は報告書において記載があり、ルーブリック方式の効果についても議論がなされているものの、交渉学に関して、その学習成果をどのように測定するか、たとえば、ルーブリックによって運営するか、あるいは、それ以外の方法があるのかなどについての検討が十分になされているのかどうか、報告書では明確ではない。これは第一の指摘にも関係するところであり、この点について、今後、検討する必要があるのではないと思われる。

第三として、交渉学に関するプロジェクトであることから、現在、取り組みが行われている交渉学の内容、特にLearning Assistantが交渉学を「教える」側に回っている場合、その教育内容の質の確保に関して、どのような支援体制がとられているのか、についても、報告書の記述では、具体的にイメージすることが出来なかった。アクティブ・ラーニングでは、教員もしくは専門家による適切な学修支援体制が重要であり、この点について、今後、引き続き検討する必要があるものと料する。

次年度以降の展開に向けて

【テーマⅠに関する内部評価ならびに外部評価に対するコメント】

交渉学ワークショップ等に参加したことによる学びの伸長について「質的データが欲しい」との指摘があったが（安藤内部評価委員）、効果は短時日で測定できるものではないので、以後も継続してデータを蓄積していく。卒業後の社会人として営みの中で学びの価値や意味を卒業生がどのように認識し、評価しているか、そのデータも収集していく。これらデータを解析するための尺度の開発を今後の課題とする。そのことが「学生が交渉学から何を学び、どのように意識が変わり、具体的にどのような行動につながったかについて…（中略）…その変化や成長を確認し、検証する」（一色外部評価委員）ことになると考えている。

また、交渉学ワークショップ等の開催が複数回に亘るものの、それらの相互連関が見えにくく、「単発イベントの連続に留まるのではなく」（中村内部評価委員）、「それらを効果的に見せる工夫が欲しい」（沖外部評価委員）との指摘については、これらの研修の企画・開催が以下に示す『学生スタッフ養成プログラム』に基づくものであることをここに表す。

【学生スタッフ養成プログラム】〔KU Excelled Program for Negotiation Facilitator and Project Manager〕

本取組においては、優れたリーダーシップを持つ学生（交渉学ファシリテーター）ならびにプロジェクト・マネージャーの養成が計画されているが、それは以下のプログラムを経ておこなわれる。

- 交渉学ないしはクリティカルシンキングに関する科目の履修者の中から、才能の顕著なる学生、あるいは可能性に富む学生をLAとして採用する。交渉学ワークショップへの参加も促す。〔Discovering Promising Students / Starting the Nurturing of Negotiation Staff〕
- LAとして交渉学ないしはクリティカルシンキングのクラスにて受講生の学びを支援する営為を経験することによってファシリテーションのスキルを獲得し、それを継続的に向上させる。〔OJT for Negotiation Facilitation〕
- 交渉学ワークショップなどへの参加経験ならびに授業におけるLAの経験を活かして、交渉学ワークショップにおけるファシリテーションを担う。また学生を主たるオーディエンスとする交渉学ワークショップモジュールの企画・運営を担う。〔OJT for Excelled Negotiation Facilitator〕
- 社会人が主催する交渉学ワークショップならびに研究会・学習会に参加し、知見を深め、スキルアップを目指す。〔Advanced OJT for Excelled Negotiation Facilitator〕
- 交渉学ならびにクリティカルシンキングに関する教材作成に携わると同時に、後進を育成する。〔Contents Creator for Negotiation Practicum〕

上記3. のレベルに到達した学生を交渉学ファシリテーター〔Excelled Negotiation Facilitator〕として、5. のレベルに到達した学生をプロジェクト・オーガナイザーとして認定する。〔Excelled Negotiation Workshop Organizer〕 交渉学等の科目開設が最低限であるという指摘（川嶋外部評価委員）については、科目新設に関わる制約の中で最大限の成果であること、今後、科目等の再編により可能な限り増設していく予定であることを付記しておく。

【テーマⅡに関する内部評価ならびに外部評価に対するコメント】

1. クラスループリックという用語について

複数の委員より、クラスループリックの定義が明らかではないとのご指摘を受けました。これは日本の教育現場レベルでは用いられている用語であると認識しており、まさにメタループリックやコモングループリックなど、組織的に共有される指標との区別として用いています。意味は、それぞれの授業のニーズにより開発されたループリックのことを意味しております。またクラスループリックおよびコモングループリックの開発・改善は、授業担当者の先生方の実践に寄り添いながら、担当の匿名教員および専任教育が実際の授業に参与する形で行っております。初年次教育系の研修では複数の授業担当者が同様のレポートを採点しながら評価をすり合わせするワークショップも実施し、そこで出た意見をループリックの記述語に反映しております。今後もこのように学士課程教育や授業に寄り添うループリック開発を行ってまいります。

2. クラスループリックとコモングループリックとの関係性について

初年次教育を事例に、コモングループリックをクラスループリックに適応させる試行をすでに文学部で行っております。この場合、文学部と教育開発支援センターで合同研修会を行い、コモングループリックの提示、さらにその適応のための個別サポートを現在実施中です。

また次年度には、他2学部も同様の学部固有の初年次コモングループリックを活用していく予定となっており、それらをメタ化していくことで、現在検討中のアセスメントポリシーと接続させていく計画となっております。その後は教学IRとの各種調査とも接続を検討してまいります。